

室井尚×吉岡洋 連続講座

哲学とアートのための

12の対話 — 「現代」を問う

テーマ  
⑦ 私は本当に

私なのか？



---

## 第7回 私は本当に私なのか？

---

吉岡 洋 (進行 安藤泰彦)

安藤 時間になりましたので、第7回の講座を始めたいと思います。今日もたくさんお集まりいただきまして、ありがとうございます。初めての人も約半数ぐらいおられますので、簡単にご説明します。ちょうど1年ほど前に室井さんと吉岡さんに話をもちかけまして、12回の連続講座を京都芸術センターでやろうということになりました。

ところが、ホームページその他でご存じのように、室井尚さんが3月の21日に亡くなりました。どうしようかと考えたんですけれども、12回の連続講座を予定通りやっ払いこうということになりました。今日は7回目ということで、半分が終わったことになります。

この12の対話というのは、室井さんと吉岡さんの対話ということを念頭においていたんですけれども、「対話」という表題も残したのは、皆さんと吉岡さんの間の対話を考えてのことです。

ですから後半には質問や対話の時間を設けますので、ぜひ感想とか意見とか言っていただければありがたいと思います。それでは最初に映像を見ようと思います。この映像は、まだ室井さんがおられた3月12日に行ったプレ講座の中から、今回のテーマに関係する部分を抽出したものです。



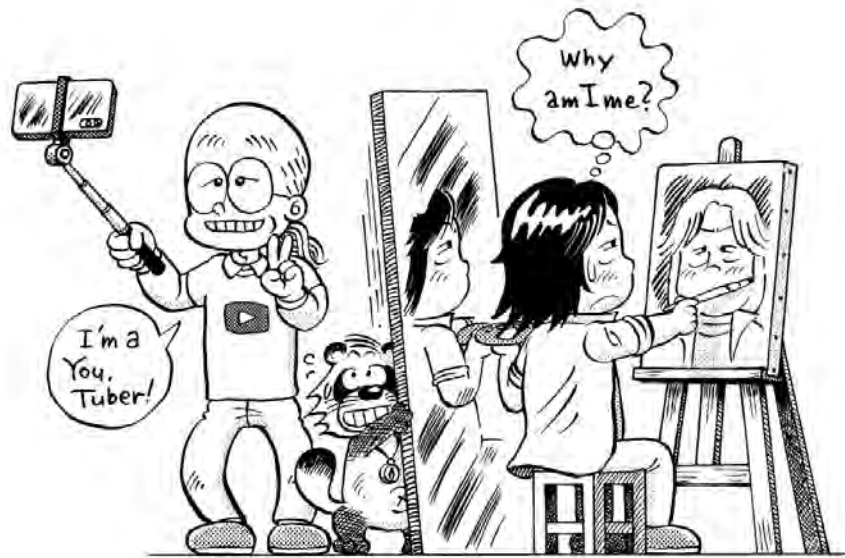
<https://youtu.be/60l9SB4Ja7I?feature=shared&t=2175>

プレ講座 (2023.3.12) 記録映像 ー第7回 私は本当に私なのか？

吉岡 今日で7回目、一年の後半に入ったわけです。毎回のように来ていただいている方、今日初めての方も見えますけれども、この大広間の風景っていうのはたぶん一生ぼくの記憶に残りますね。1ヶ月に一回こういうことをしてきたっていうのが。

先ほどの映像でも言っていましたが、各回のテーマは室井さんとぼくがかわりばんこに出し合ったもので、今回の「私は本当に私なのか？」は室井さんが出したものです。プレ講座では室井さんはあまり詳しく説明していませんので、彼の書いたものから少しテキストを用意してきました。

毎回谷本さんがチラシに面白いマンガを描いてくれるのですが、今回の秀逸ですね。第5回の振り返りマンガでは、僕と室井さんの書いたSFを、一つの新しいSFにまとめてくれています。そして今回の講座紹介の部分には、室井さんが「Why am I me?」と心の中で問いかけながら自画像を描いている横でタヌキが鏡をかざしていますが、ぼくはといえばスマホで動画の自撮りをして、「I'm a You, Tuber」と変なことを言っている。YouTuberをコンマで切って、「私とは一人のあなたなんだ、チューバー」みたいなことですね。チューバーというのは名前みただけど、ジャガイモのような「根茎」のことで、フランス語だと「リゾーム」です。そういう遊びも入ってるみたいです。



イラスト／谷本 研

さて「私は本当に私なのか」というテーマに関して、室井さんが今まで書いてきたテキストの中で何か引っかかるものがあるかと思って探してみたんですが、学部時代に書いたブランショの卒業論文というのは知らないのですが、また『情報と生命』の中で室井さんが書いた「ソフトウェアとしての精神」というエッセイから抽出しました。

これは第2章かな。第1章に僕の書いた対話的なフィクションがあつて、それはコンピュータウイルスみたいな自立した情報体が、人間の心の中に侵入してくるみたいな話なんですよ。その後に室井さんが書いたテキストから少しだけ抜き書きしました。5頁の引用文【私とは誰か】をご参照ください。

『情報と生命』を書いたのは'93年です。インターネットやパソコンが普及していなかった90年代以前においては、人間の心はどこにあるのか？ というような問いに対して、一般にはたとえばお腹とか、胸とか、いろいろな答えようがあつたのではないかと思います。ところが90年代に入ると、多くの人が心とは脳の働きだつて考えるようになった。それは、脳はコンピューターみたいなものだというイメージを、何となくみんなが共有するようになってきたからで、明らかにパーソナルコンピュータが身近なものとして普及してきた結果です。

室井さんのテキストの最後のところで「一部の哲学者をのぞく」つて書いてあるけど、この「一部の哲学者」つてというのが、ぼくらがその頃よく議論をしていた、コンピュータサイエンスの周辺で議論していた「心の哲学」という領域の哲学者たちです。彼らは、「脳＝コンピューター」とか、「心＝脳」なんて単純な同一視はできないと主張し、そうした単純な同一視からどんなパラドックスが導かれるのかを示そうとしていました。

室井さんやぼくも1980年代後半にパーソナルコンピュータを使い始めました。といっても今のようには便利ではなく電話の方が早い、みたいな世界で、周囲からは何を物好きなことをしてるんだという反応だったんですが、90年代に入るとだんだん普及し始めて、コンピュータというのが身近な存在になり、多くの人が「考える機械」というものを実物として目にするようになりました。それまではSFのような物語の中とか、大学や企業や軍の研究所にあるメインフレーム、大型コン

コンピュータが支配的なイメージだったのです。そうした変化の結果、人間の精神活動をコンピュータのようなモデルで考えることも広がり、心とは脳であり、脳はコンピュータのようなものだっていうことが、常識になってきました。

そうした時代的趨勢に対して一部の哲学者は、「心が脳にあるなんておかしい」と主張した。僕はそうした議論をとっても面白いと思っていました。一番有名なのは、ギルバート・ライルというイギリスの哲学者が唱えた「カテゴリー・ミステイク」、つまりカテゴリーの間違いという概念です。人間に身体と心があることは確かだけれども、心は身体のような物とは全く異なったあり方をしているのに、物と同じようなカテゴリーでいい表す——たとえば心が「どこかにある」といった——ことから混乱が生じるという指摘です。それは心だけではなくて、たとえば「京都芸術センターはどこにあるか？」っていうと、誰でもここにあるって言うけれども、何年かしてこの場所が使えなくなってどこか他の場所に移転しても「京都芸術センター」であり続けます。極端な場合東京ディズニーランドのように、京都の中になくても「京都芸術センター」は存在することが可能なのです。そうした組織は建築物のような物体ではないからです。

カテゴリー・ミステイクは穏健な哲学的指摘なのですが、そのことをより直観的に示すために、SFのようなフィクションを利用する人もいました。もしも心が脳の活動であるから心は脳にあると言えるとしたら、私の脳を身体と切り離して培養器の中で生かしたとしても、私はその脳「の中」にいることになる。ではその脳を右脳と左脳に切り離して、その間を繋いでいる神経繊維を人工的なケーブルに置き換え、右脳をある部屋に、左脳を隣の部屋に置いたとしたら、私はいったいどちらの部屋にいることになるのか？ さらには神経伝達をワイヤレスで繋いで（もちろん伝達の時間的遅れという問題は生じますがそれは無視して）100メートル、あるいは100キロ離れた場所に置いたらどうか？ いや、極端にすれば無数の神経細胞を全部バラバラに切り離して、一つ一つを宇宙の別の惑星に置き、それらの間を無線で繋いだとしたら、私（の心）は宇宙全体に広がっている、ということになるのだろうか？

こういうのは思考実験、現実的にはありえないとしても考えることは可能、ということです。しかしこうした想像力が一般に受け入れられるようになったのは、パーソナルコンピュータの普及と非常に関係があると思うんです。心とは何かについてのこうした想像が、一部のSFファンや哲学者にとってだけでなく、普通の常識の中に入ってきたというのは、大きな変化だと思います。つまり1990年代以前には、多くの人は心とは何か、どこにあるのかといったことについて、深く考えたりしていない。強いて心って何ですかって聞いたら、それは目に見えないものであって、物とは全く違うが、しかし確実に存在する何かである、というように答えるのではないかなと思うんですよね。

それに対して1990年代以降は、哲学者でもSFの読者でもない普通の人が、脳とはコンピュータのようなハードウェアで、心とはそこにインストールされたオペレーティングシステム、あるいはアプリケーションにすぎないというようなイメージを、受け入れるようになったのです。室井さんと『情報と生命』という本を書いた頃は、まさにそうした変化の過渡期でした。だから彼が先ほどご紹介したテキストに「ソフトウェアとしての精神」なんていうタイトルを付けた時には、スキャンダラスとまでは言えないとしても、えっ！というぐらいの感じだったわけです。それに比べると今はどうでしょうかね。心、精神が「ソフトウェア」と言われても別に驚かない、「まあそりゃそうでしょう」という感じじゃないでしょうか。

### 私とは誰か？

「私」とは何なのだろうか？ 私という人格、私という人間の核となる部分、私の自己同一性はどこに存在しているのだろうか。私の身体？ 私の声？ それとも、私の顔？ いや、そうではないだろう。私のなかで本当に何物にも代え難いもの、真にかけがえのない私自身であるもの——それは私の精神（あるいは心）であると答える人が多いのではないだろうか。

だがそれでは「精神」とはいったい何なのだろう。この問いに対して現代人のほとんどは、それは「脳」のことである、と答えるのではないだろうか。脳と言ったところで、本当は何も答えたことにはならない。だが、少なくともぼくたちが「精神」と呼んだり「自己」と呼んだりしているものが、身体の中の「脳」という部位に含まれているというのが、どうやら一部の哲学者\*を除く一般的な現代人の常識であるようである。

.....  
\*一部の哲学者：哲学において「心身問題」と呼ばれている問題領域がある。脳や神経組織と「心」を単純に同一視してしまう科学者や一般常識に対して、一部の哲学者はそれをカテゴリー・ミスエイクと批判しており、脳と心とは全く別のカテゴリーのものであると主張している。

### ソフトウェアとしての「私」

だが、情報センターとしての脳自体は、コンピュータがそうであるような意味での「機械」にすぎない。それでは「私」とは結局のところ機械なのだろうか？ これもそうではあるまい。なぜなら、機械としての人間の脳の個体差はわずかであり、どの人間の脳を取り出してきても対して変わりはないからである。これでは、唯一のかけがえのない「私」はどこからも出てこないではないか。

そこで現れてきたのが、脳をハードウェアとし、精神をソフトウェアとする考え方である。私の意識、私の人格とは脳の中の「ソフトウェア」なのだ。このソフトウェアは学習をし、変化し、自己生成するプログラムであり、このプログラムこそがあなたの本体なのだということになるだろう。これはまたヨーロッパの伝統的な二元論とも一致する。つまり、神的な「精神」と物質的な「身体」は違う種類の実体だというわけである。

室井尚「ソフトウェアとしての精神」（室井・吉岡『情報と生命』新曜社、1993）より。  
ただし原文の「あなた」を「私」に置き換えている。

精神がソフトウェアであれば、今回のチラシで取り上げられたマンガのように、室井さんの精神は他の機械に移植しても、室井さん自身であり続けるっていう、そういうことが考えうるのだと思います。今回用意したもう一つのテキストは、ぼくがもう20年くらい前に書いた「新・共通感覚論」っていう短いエッセイです。これは出版したものではなくて、オンラインで発表したものです。ぼくはまだ甲南大学に勤めていた1998年くらいから、個人のホームページを作って、そこにオンラインでエッセイを書いてきたんですが、これはその一つです。結構いろんな人が読んでくれて、印刷物にも転載されたりしました。その後には美術作家の高嶺格さんが横浜美術館でやった「遠くてよく見えない」っていうインスタレーション作品の一部として使ってくれたりしました。

## 新・共通感覚論

あなたの見ている赤とわたしの見ている赤とは、本当に同じ赤なのか？

哲学入門書などによく紹介されるアポリア（難問）だ。そしてそれは、証明も反証もできない問題であるとされている。もう少し深刻なものになると、「私以外の人間は本当に私と同じような心をもった存在なのか、実は精巧なロボットにすぎないのではないか？」というのがある。世界のなかに確実に存在するのは、この〈私〉の心だけだという立場、いわゆる「独我論 (solipsism)」である。議論はここでは省略するが (Thomas Nagel, *What Does It All Mean?* に、わかりやすく解説されている)、これも合理的に反駁することはできない。

独我論——ウイットゲンシュタインをはじめとする少数の哲学者たち、そして精神を病む少なからぬ人々にとって、これは生きることの根本的意味にかかわる、きわめて切実な問題である。それに対して大多数の人々にとっては、この種の懐疑は非現実的なものに思えるだろう。反論できなくたって、そんな懐疑が何も生み出さないことはわかっている、と多くの人言うにちがいない。世界の中に本当は私ひとりであろうがなろうが、現実の世界は変わりはない。だからそんな不毛な哲学的言葉遊びは、端的に無視してよい、と。

このように独我論は克服されるのではなく、無視され、未解決のまま放置される。だがそのことによって、〈独我論〉は生き延びてしまう。たしかに常識的な思考、つまり共通の世界や他者の自然な存在を自明のこととする「健全な」思考は、世界の中には自分一人かもしれないなどという「病的な」思考とは、一見正反対に思える。だが、共通の世界や他者が素朴に実在しているという前提こそ、実は〈独我論〉に深く侵されているのだ。〈素朴実在論〉と〈独我論〉とは、コインの両面である。あるいは、〈独我論〉とは〈常識〉にとつての「無意識」なのである。言いかえれば、素朴な日常的意識には、〈共通の世界は本当は存在しないかもしれない〉という不安が、つねに影のように付きまとっているのだ。

この不安を本当に克服するためにはどうすればいいのか？ それには、何らかのやり方で〈独我論〉の問いに直面するしかない。だがここで言う〈独我論〉とは、「他者の存在は論理的に証明できない云々」というような、抽象的な議論のことだけではない。重要なことは、わたしたちが世界を「共有」とはどういうことかについて、真剣に考えることである。「常識」、それも本来の意味での「コモン・センス」が問われているのだ。「コモン・センス」、つまり「共通感覚」の存在とは、とうてい自明な事実などではないのである。

感覚器官や神経系の生理的な構造が種によってほぼ共通していることは、そうした「共通感覚」が存在する根拠となりうるだろうか？ 否である。たとえば、イナゴが同じ匂いを知覚するときに神経細胞が発火する時間的パターンは、個体ごとにまったく異なっていることが知られている。2匹のイナゴが「同じ」匂いを知覚する根拠は、

感覚器官の解剖学的構造や神経興奮のパターンの共通性にあるのではなく、種の進化をも含めた、それぞれの個体の「来歴」によるのである。

(下條信輔『意識とは何だろうか』、講談社、127頁)

認知科学が明らかにするこうした事実は、何を教えるだろうか？ それは、「共通感覚」を素朴な意味で前提することなど、とうていできないということだ。わたしたちはそれぞれ、まったく固有の仕方世界を知覚している。それらは、互いに比較することも確認することもできない。にもかかわらず、特定の波長域の光を〈赤〉と呼び合うようなコミュニケーションは可能であり、共通の世界が、あたかも存在しているかのようにみえる。この、一見矛盾するような事態を可能にしているのは、生きるという経験、生命という情報処理過程の集積である。重要なのは、感覚器官の存在ではなく、身体というメモリに刻まれた「来歴」なのだ。

スロヴェニア出身のユジェン・バフチャルという写真家がいる。(港千尋『映像論——〈光の世紀〉から〈記憶の世紀〉へ』、NHKブックス、236頁～参照)。かれは全盲である。盲人の写真家！ このことにある戦慄をおぼえるとしても、無理はないだろう。けれどもそれは、本当はそれほど異常なことだろうか？ 盲目の写真家という観念に、シニシズムを感じる人、自分の撮った作品を自分で「見る」ことができないことに、悲惨さややり切れなさを感じる人もいるだろう。だがそれは、その人がまだ「見る」ことの素朴な共通性を信じており、したがって、いぜんとして〈独我論〉に深く侵されているからではないだろうか？

アスペルガー型自閉症の動物学者テンプル・グランディンは、他者の人間的感情を実感できない(オリヴァー・サックス『火星の人類学者』吉田利子訳、早川書房)。彼女は科学の論文はなんなく理解できるのに、『ロミオとジュリエット』を読むと「いったいかれらは何をしているのか、さっぱりわかりませんでした」と言う。愛や疑いや嫉妬はすべて複雑すぎ、彼女にとっては経験によって理論的に推し量るしかないものである。また、彼女は他人と身体的に触れ合うことは困難だが、抱きしめてはほしい。そこで、空気圧で自分を抱きしめてくれる機械を自作した。その機械に入って、安らかな気分になった彼女は言う。「きっとみんなはほかの人との関係でこの気持ちを味わうのでしょうか。」

ぼくたちは「同じ」世界に住んでいる。ぼくたちがユジェンと、そしてテンプルと共有している領域——それが「共通感覚」なのである。共通感覚は、特定の感覚器官の存在や、「正常な」精神的発達によって可能になる自然な条件などではない。「五感」から出発しても、「意識」から出発しても、こうした共通感覚にたどり着くことはできない。共通感覚とは、むしろひとつの「飛躍」なのだ。それは、「ほら、そこに見えるだろう」とか「人間なら誰もこう感じるもんさ」といった、常識的な同意の自明性を棄却したとき、つまり自然なコモン・センスを断念したとき、はじめて到達できる何かなのである。

吉岡洋が2002年に書いたオンライン・エッセイより。

ここで言いたかったことのひとつは、物理的な過程が同じでも経験は同じだという保証にはならないということです。つまり、脳科学の専門家が赤い色の「赤さ」を感じてる脳の活動を示して、その神経細胞の活動のパターンが同じだということを示しても、私の感じている「赤さ」と他の人が感じている「赤さ」が同じだという証明にはならないんですよね。目の前の人は同じ色を指して「赤い」と言葉で言うかもしれないけど、もしかしたらその人の心の中では、ぼくが青い色を見たときに感じることを経験しているかもしれないからです。そしてそのことを証明したり反証したりする方法はない。異なる人の心の中の経験を取り出して、ふたつ並べて比べるわけはいかないですからね。

「私」についての経験もこれと同じです。誰もが、私は私だ、当たり前じゃないかと思っている。私が私であることの自明性、この「私さ」を疑っていません。そして目の前の他人も、自分と同じような私の「私さ」を経験しながら生きてると信じています。けれども、そうであるという証明はできないのです。目の前の人に「この色は赤いですか?」と訊くのと同じように、「あなたは自分が私だという感覚を持っていますか?」って訊いたら、「うん、持ってるよ」って言うかもしれない。でも、本当に持っているのかは分からないですね。もしかしたら前にいるのは高性能のロボット、AIかもしれないでしょ。訊かれたらそう答える反応を示しているだけで、その内部には自分と同じ「私さ」の経験は存在しないかもしれません。ChatGPTに訊いたらどう答えるでしょうね。SIRIは「私はプログラムですから」みたいな、興醒めな答えをしますが。

ロボットやAIじゃなく人間同士でも、この問題は話題になっています。「サイコパス」っていうのが知られてきましたね。実は僕の元同僚がサイコパスの専門家なんです。心理学者で、機能的MRI (fMRI) という機械を使って脳の活動をリアルタイムで観察できる装置を使って、人間の経験と脳の活動との関係を研究している人です。たとえば、ウソをついている時の人の脳はどんな活動をするのか、また浮気をしてる人の脳はどうかとか。

サイコパスというのはつまり共感能力の欠如している例で、普通の人だったら誰かが怪我をして痛がってたら、自分は怪我してなくても痛いみたいな感覚がありますね（というかあることを前提してしゃべっているわけですが）。他人が痛そうな表情をしていると痛いだろうなっていう気持ちが起こって、ほとんど自分自身が痛みを感じるような活動を脳がするので、なるべくそれを避けたいという気持ちが起こる。けれども、そういう共感が全く起こらない人も存在するので。人が痛がっていても、痛みを感じない。

そういう人も「痛みとは何か」ということは理解しているんですよ。悔しいとか、傷つけられたとか、そうしたネガティブな感情がどのように表現され、コミュニケーションされるかは理解している。けれども、自分の内部では感じていない。痛みの「痛さ」は分からないのです。でも社会の中で「痛み」がどのように評価され影響を与えるかは知っているので、痛みを目の当たりにするような状況で人間はどんな行動をとるかってことは全部学習している。だから痛みを感じる人と同じ行動をとれるから、周りからは気づかれないんですね。

学校の勉強とかスポーツとか仕事とか、私たちは多かれ少なかれ競争の中に生きているじゃないですか。競争の中で勝ったり負けたりして、ある場合には人を押し退けたり犠牲にしたりして勝ち抜くような場面もあると思います。不正な手段を使って他人を踏み台にするみたいなことも起こりえます。しかしその時、負けた人のことを思い自分は悪いことをしたなと良心の呵責を感じる人と、そうした感覚をあまり持たない人がいる。どちらがより勝ちやすいかというと、もちろん他人の気持ちなど感じない人の方が有利です。勝ち続けるために余計なストレスがありませんからね。

人を傷つけても心が痛まない人っていうのがこの世界には存在するんです。もちろん、犯罪



に結びつく時もあるんだけど、たいていの場合は気づかれない。いったいどれぐらいの比率でそんな人はいるんですかって聞いたら、100人に1人ぐらいと言うんですね。ぼくは思ったよりも結構多いと思って、100人に1人だったら京大の先生たちの中にもかなりいますよね、って言ったら、いや、この大学にはもっていますよ、と(笑)。どういうことかということ、研究者、企業経営者、政治家といった、競争性の高い社会で上に上る人っていうのは、サイコパスの比率が多いって言うんですよ。それを聞いてから、ぼくは京大の先生に会う度にこの人はもしかして……みたいな目で見えるようになってしまったんです(笑)。

たしかに政治家とか見ると、こんなひどいことを言ってこの人は心が痛まないんだろうかと思うような人がいますね。もちろん、他人の痛みが感じられないというだけで犯罪者というわけではありませんが。逆に犯罪を犯した人でも、他人の痛みを感じるが何らかの事情で罪を犯さざるをえなかったという人もいるでしょう。そういう悪人には私たちは同情を感じるかもしれませんが。しかし犯罪者にはならず、ただ人を踏み台にして勝ち抜いて成功していく人の方がたぶん多いのでしょうね。

そういうことを考えていると、目の前の人信じられなくなって辛いですね。極端なことを言えば、この人は一見自分と同じような人間に見えるけれど、本当は精巧なロボットに過ぎないのかもしれない、とすら疑われます。自分と同じような反応を示すけれども、内部では何も経験していないのではないかと。

この疑いを徹底したところに出てくるのが、世界の中に確実に存在するのはこの私だけではないかという立場、哲学では独我論、ソリプシズム(Solipsism)って言うんですけどね。哲学者でなくても、思春期ぐらいの頃にそうした想像をする人もいます。今の言葉でいうと「中二病」ですかね。僕自身は、自分がその頃からあまり進歩していないような気もするのですが、この独我論というのが面白いと思うのは、それがまともに議論できない問題だからです。哲学はどんな問題でも俎上に乗せるかということ、職業的な哲学は議論できる問題しか扱いません。世界の中には本当は私しかいないのではないかというのは重要な問いだし、ウィトゲンシュタインのような哲学者や、精神を病む少なからぬ人々にとっては切実な問題だと思うんですが、哲学的にはけっして最前線の問題ではないわけです。

職業的な哲学者にとって哲学的な問いと言うのは、論文が書けるような言語的ゲームとして他の哲学研究者たちに承認されていなければならない、そうしたゲームの課題として認められている問題なら、自分が自分の人生をかけてそれに悩んでなくてもいいんですよね。その難問をうまく解いてみせることが大事で、しかもその解答が常識に反するような奇抜なものであれば、注目されて有名になります。まあそれも面白いとは思いますが、ぼくはあまり興味を惹かれませんが、それよりも、容易に定式化できない問題、論文に書けないような問題の方に惹かれます。「世界に存在するのは私だけじゃないのか?」という問いは、そういうものです。

この問いには反論できないのです。しかし、反論はできなくてもこの疑いにとらわれる必要はない。反論なんかできなくても普通に生きていけるし、そんなこと実際の人生には関係ないじゃないか、とも言える。世界に自分しか存在しなくても、実際上は何も変わらないじゃないか、ということ。だったらそんな問いは無視してもいい。私たちは実際には、世界について共通の感覚を持つことを前提にして生活しているからです。つまり独我論というのは克服されるのではなく、たんに忘れられるってことです。忘れられ、放置される問いなのですね。そこでぼくが問いたいのは、「共通」とは何かということなんです。

共通の世界は客観的には存在しないかもしれない、そういう不安は常に存在しているんだけど、そのことは忘れて生きていかないとどうにもならない。このテキストでは下条信輔さんの『意

識とは何だろうか』という本の中に出てくることを引用しているんですけど、生理的な構造や過程の類似性は必ずしもそうした「共通」性を保証してくれないんですね。私たちはつい、同じ人間だから——つまり感覚器官や神経系の生理的構造が種によって似ているから——世界を同じように見ていると考えがちです。。このことが共通感覚、共通感覚とはコモンセンスの訳語で「常識」と同じ言葉なんですけれども、そうしたものが存在する前提であるかのように考えられている。でもそんなことはない。下條さんの本によると、例えばイナゴが同じ匂いを知覚する時に神経細胞が発火する時間的なパターンは、個体ごとに全く異なっているというのです。つまり2匹のイナゴが同じ匂いを知覚する根拠は、感覚器官の解剖学的な構造とか、神経興奮のパターンの共通性にあるのではない。

脳や神経系の活動パターンが同じだったら、同じものを感じているのかということ、そうではない。同じ匂いを知覚していても、神経の活動パターンは個体によって全部違う。人間の場合も同じで、赤い色を見ている僕の脳は、同じ色を見ている誰か他の人の脳とは、違う興奮のパターンを示しているんですね。だから赤い色の赤さという経験が共通しているというのは、客観的な生理的レベルの話ではないということですね。

それでは私の経験、私が私であるということは何に支えられていると考えるべきなのだろうか。ひとつのヒントは、私の「私」性を支えているのは、素朴な客観的事実ではなくて、生きてきたという経験の蓄積、生きるために行ってきた膨大な情報処理の結果であって、いわばこれまで生きてきた来歴、ヒストリー、それが私を作っているという方が、ずっとふさわしい言い方なんじゃないかということです。身体というメモリーに刻みこまれてきた生の来歴があって、それぞれの個体が違う仕方世界を経験してきた結果パターンが形成されたということだから。

このテキストでもう一つ取り上げているのは、スロヴェニア出身のユジュン・バフチャルという人です。港千尋さんの本にも紹介されている人ですが、全盲の写真家なんです。盲人の写真家や美術家というのは結構いるんです。たとえば僕の友人でも光島貴之さんという美術家があります。こうした世界にあまり馴染みのない人にとっては、見えないのにどうやって写真を撮ったり美術作品を作ったりできるのかと思うかもしれません。でもそれは可能なのです。バフチャルはモデルを使って室内で写真を撮ったりしてたのですが、モデルにポーズをさせて写真を撮る時に、「近くで見る」っていうような表現をするらしいです。僕の友人の光島さんも、作品制作について話す時には頻繁に「見る」という表現をします。

生理的な器官を通じた視覚はないんですよ。しかし「見る」という経験は成立しています。このことがとても重要だと思います。「見る」ためには目が必要じゃないかという考え方が、いかに間違っているかが分かります。

それから、このテキストで言及したもう一つの例は、自閉症の動物学者でテンブル・グランディンという人です。一時期かなり有名になった人なんだけど、今はそれほど知られていないですかね。もともとは有名な精神医学者のオリバー・サックスっていう人が書いた『火星の人類学者』っていう本で、ぼくは知りました。「火星の」っていう言い方は、常識とは違う考え方を紹介するときによく使われる比喩的表現なんです。

その中に、テンブル・グランディンっていう動物学者の話が出てきます。彼女は他人の感情を実感できない。知能はとても高いんです。科学の論文は難なく理解できるのに、「ロミオとジュリエット」を読むと、いったい彼らは何をしてるのかさっぱりわかりませんっていう。大学で教えていて、博士課程の論文を指導している学生が、論文が進んでないので聞くと「すみません、実は昨日失恋したんです」と告白する。ところが「それじゃあ、しばらく休んでから」とはならないで、「えっ、それと論文と何の関係があるの？」って思ったらいいですね。面白いけども、大変だ。愛、

嫉妬、疑いといった経験は、彼女にとって複雑すぎて理論的に推し量るしかないような感情なのです。

彼女は他人と身体的に触れ合うことが困難なんです。自閉症の人には他人に触れられるのが嫌だという人はいますよね。ただ彼女は、触られるのは嫌だけでも抱きしめては欲しいと思う。一見矛盾してるようだけど、理解できます。「触れられる」というのは人間社会の問題だけど、抱きしめられる安心感というのは生物レベルのもんですから。それで、彼女は空気圧で自分を抱きしめる機械を自作した。それで安らかな気分になった彼女は「きっとみんなは他の人との関係で、この気持ちを味わうのでしょうね」って言う。

グランディンはたくさん本を書いてとても有名になったのですが、その理由の一つが、彼女は「動物の言葉が解る」「動物の気持ちが解る」といった宣伝がされたからです。本人は必ずしも肯定していません。動物の言葉が分かるのはドリトル先生だけですからね。でも動物の気持ちがわかるとはどういうことかという、普通に社会適応している人間の先入観を持っていないということではないかと思います。自閉症じゃない普通の人は、社会的に共有されている言語習慣とか共感能力に阻まれて、動物の心が見えなくなっている。でも彼女にはそれがないので、その分動物の気持ちが分かるということではないかと思います。

今思い出したことで正確ではないかもしれませんが、彼女の知り合いに屠殺場に勤めている人がいて「屠殺場に向かう牛がある場所で立ち止まって動かなくなるので、その理由を調べてほしい」と言う。これだけ聞くと、ぼくたちは「そりゃあ、牛も殺されるのは嫌だから途中で立ち止まったりするんじゃないか」といい加減な想像をします。でもテンプルは、そんなことは絶対ないと言う。なぜなら、人間以外の動物は死を怖がらないから。動物は、苦痛や閉じ込められたりすることは嫌がり、なるべくそれを避けようとするけれども、死そのものは怖がらない。だから死の恐怖で牛が立ち止まるのはおかしいと考える。

それで実際の屠殺場に行って、牛と同じ目線でその経路を自分も歩いていくんです。するとある場所に来て「ああ、ここです」って言うんです。そこに行くと、前方に水溜まりみたいなのがあって、そこに陽の光が反射してキラッと反射が来るんだって。牛たちはこれを嫌がっていたんです、ということが分かって、問題は解決したと。するとすごい、この人は動物の気持ちが分かるんだとなるじゃないですか。でも、そういうジャーナリストイックな解釈はまったく信用できない。人間は動物の気持ちなんて分からないし、それでも動物と共生できるし、別にそれでいいんです。

共通感覚とは一種の飛躍なのではないかと、ぼくは考えたんです。意識や理性から出発しても、共通感覚にはたどり着けない。つまり「私たち同じ人間なんだから、こう感じるのが自然でしょう」とか、「ほら、そこに見えるじゃない、誰でも見れば分かる」とか、そうした自明の共通性を前提にしているようなコミュニケーションが、真の共通感覚を隠しているのだと思います。共通感覚に至る道は、むしろそこから一步踏み出すこと、常識から離脱するっていう契機の中にあると思います。これが「私はなぜ私なのか」という問いにアプローチするために選んできた態度なんです。

まだ少し時間があるので、質疑応答に移る前に、安藤泰彦さんが今回のテーマについて面白いコメントをくれたので、それを紹介しながら反応してみます。まず最初は、室井さんが言っていた、モーリス・ブランショの『文学空間』という本に引用されているフランツ・カフカの言葉です。カフカがその年下の20歳ぐらい離れているグスタフ・ヤノーホっていう若い友人に「私は孤独です、フランツ・カフカのように」と言った。「フランツ・カフカのように」って、自分のことですよね。沈黙するのではなく自分は孤独だと発話するとはどういうことか。「私は孤独です」と言った瞬間に、それを聞く相手があり、孤独ではなくなってしまう。そして「私は孤独です」というこの言

葉の中の、この「私」っていったい何なんだっていうことです。

孤独だと言ってる私は、そのように語りかけることによって、やはりそれが誰かに聞かれる、あるいは読まれるということを前提しているのです。私たちが日記や手記を書いたりする時、これは誰にも読ませるつもりはない、自分が死んだら棺桶に入れて一緒に焼いてもらうという気持ちで書く時もあるけれども、言葉ってというのは本当に自分だけに向けて発することは可能なのか。書くことによって、その瞬間にもう一人の読む自分が作り出され、つまり言葉を発するだけで「私」はすでに二重化しているのではないか。そもそも言葉を発するかぎり、厳密には孤独ではありえないのではないか。

このことを言葉の側から考えると、ようするに「私だけの言葉」というのは存在しないということです。そもそも言葉って自分が発明したものではないし、自分の好きになるものでもないですからね。この言葉は私だけに通じる意味で言ってる、ってそれこそ言葉でそう言うことはできるけれども、言葉で言うという行為自体が理解され解釈されることを要求しています。なぜなら言葉は私の外から入ってきたもので、私ではない多くの人々が発してきた言葉が、私の思考や感情の中に入り込んでいるのです。その人々というのは、母親や家族、友達のような同時代の生きている人間だけではなくて、過去の人々、書かれたものを通してしか知らない祖先たちでもあります。

現在生きている私たちが話している言葉とは、その言葉が経てきた来歴に連続しており、言葉の意味はそうした来歴の全体によって支えられているということです。大袈裟な言い方をすると、英語を話すということは、古典文学など一行も読んだことなく、ミルトンやシェークスピアを話していることになるし、日本語を話すということは『源氏物語』を話していることになるのです。だから過去に蓄積され読まれてきたテキストは、現在の私たちにとって意味があるのです。歴史から切り離された単純な「私」というものはそもそも存在しえない。私とは無数の他者が入り込むことで実現されている、ひとつの状態の名前なのです。

二番目のコメントは、もっと身近で生々しいトピックです。「承認欲求」とはそもそも誰を承認してほしいのか？あるいは「自分探し」って、人はいったい何を探しているのか？よく言われる「承認欲求」っていかにも大げさな言葉だけど、たいていの場合はSNSでの「いいね」の数とか動画の視聴回数とか、ただの数値評価じゃないですか。つまりは軽い話で、それが「承認欲求」という言葉の重さといかにも不釣り合いな感じがします。一方「自分探し」という言葉は、一時期ほど言われなくなったかな。ネット文化以前の方が「私探し」とか言っていたような気がする。理由もなく仕事を辞めて長期の旅行に立った人について「彼どうしたの？」と訊いたら「自分探しの旅に出たらしい」(笑)とか。ぼくはやったことない、自分探しの旅、やった事ありますか、みなさん？そもそもどこに行けば自分が見つかるのだろう(笑)。(客席から「インドとか」)ああ、それは僕の世代ではありました。インドって本当の自分が見つかる場所なんですか。(客席から「思想とか、イメージとか?」)でも西洋人の若者が日本に自分探しに来ることもありましたよね。

それから「私」という感覚、自己意識というのは生きていればあるのが当然かという、そうでもない。たとえば子供が「私」っていう言葉を使い出すのは、言葉を喋り始めてだいぶ経ってからなんですよね。最初はお母さんや家族や周囲の事物の名前、そして自分自身もそうした事物の一つとして「○○ちゃん」と呼びます。一人称代名詞は、意味のある事物だけで構成された世界の中から、一種の抽象化を行うことによって、世界の全体と対峙している「この私」という表象が作られて初めて使えるようになるのだと思います。つまり「私」っていうのは元々あるものではなくて、言葉の発達のある段階で習得されるものだという事です。

それから「鏡像段階」について。今回のチラシの紹介マンガで面白いと思ったのは、室井さんがキャンバスに自画像を描いている横で、タヌキが大きな鏡をヨロヨロしながら支え持っているのに、室井さんはそれに見向きもしないで「私はなぜ私なのか」って心で呟いている。タヌキはそんなら「鏡を見なさい」みたいに言っているようにも見えます。「鏡像段階」っていうのはジャック・ラカンという精神分析学者から有名になった用語です。赤ちゃんは最初は自分と外界の区別も曖昧な世界に生きていて、自分の身体の各部分もバラバラなものとして経験している。それが生後6ヶ月くらいに鏡を見て、そこに映った姿を手がかりにして統一された自分の身体、「私」という意識を獲得する。

よく現代思想の解説みたいな本にはそうした絵が描いてあるけど、必ずしもすべての赤ちゃんが鏡を見て「これが自分か!」と分かる瞬間を経験するという意味ではないのです。自分に向き合っているお母さんの身体でもいいんですよ。つまり、鏡像であれ他人の身体であれ、「私」の認識は他者の表象を通してしか構成されないという点が大事なのです。自分とはようするに他者なんだという経験なのです。もちろん赤ちゃんはそんなふうに言葉で意識しませんけどね。

「私」とは自然に生まれる認識ではなくて、そのように他者のイメージを経由して抽象化されたものだから、「私」によってたしかに経験は言語的に統一され安定化するのだけれど、同時に「私」は束縛ともなり、分裂や複数化への傾向も生み出すことになります。たとえばさっきの「自分探し」というのは、ここにいるこの「自分」は本当の自分じゃない、という意識ですね。本当の自分はどこか別な場所にいる。自分は、本当の自分の不在に苦しんでいる。だからそれを探しにいくということです。本当の自分は、インドにいるのかどうか分からないけど、とにかく隣の町じゃなくてずっと遠いところにいる。そういう感じです。

「私」とは経験の統一化だけど、同時にそこには常に分裂、複数化の契機もあるということです。だから私たちは「多重人格」とか「ドッペルゲンガー」といった話に興味をそそられます。自分が複数の人格に分裂する物語は、ステイヴンソンの「ジキルとハイド」みたいな古典から、ダニエル・キイスの『24人のビリー・ミリガン』まで、たくさんあります。24人の人格なんて、もう何が何だか分からないですね。ドッペルゲンガーとは、世界のどこかにもう一人の自分がいるという空想で、様々な物語とか映画の主題になってきました。一種の都市伝説的なものとしても流布していて、この世界には自分とそっくりの人間がもう一人いるが、それに出会うと死ぬ、みたいなのかな。小学校の頃子供たちの間ではみんな知っていましたけれども、今の子供はどうなのかな。

学生の頃、京大の教育学部で教えていた河合隼雄さんが、ユング派精神分析の日本におけるパイオニアとして盛んに本を書き始めていたのですが、『影の現象学』というのを読みました。今は講談社学術文庫などで読めるはずですが。この「影」というのは、ユング心理学というアーキタイプ、集合的な無意識の中に共通に存在する「元型」のひとつで、もう一人の「私」のことです。それが物語的想像力の中に現れたものが「ドッペルゲンガー」ですね。

たしかいろんな文学作品の例も紹介されていて、たとえばドイツロマン派の作家シャミツソーの「影をなくした男」という有名なお話。子供向けの童話に書き換えられたりしてわりと知られていると思うのですが、ある男が悪魔と取引して、自分の影と、いくらでも金貨が出てくる魔法の袋とを交換するんですね。影なんて何の役にも立たないし、あってもなくても同じだと思って。すると大変なことになる。周りから「あの人には影がない」と言われて、光がある場所には出られなくなるのです。ふつう、悪魔と取引するときには魂を売り渡すのですが、一見何の役にも立たない影が、実は魂と同じくらい重要なものだったということです。つまり影とはもう一人の「私」だからですね。

それから梶井基次郎の「Kの昇天」という短編も引用されていました。語り手は海辺の療養地でKという男と知り合う。その男は波打ち際で、月の光で出来た自分の影を見ていた、ということです。影をじっと眺めていると、だんだんとそれは生命を帯びて、自分とは異なったもう一人の人格を備えてくる。それとともに自分の存在は希薄になって、月に向かって上昇してゆく、ということです。これもロマン派的な美しいイメージですが、その男はある夜、本当にその影に魅入られてしまい、影を追ってそのまま海に入って死んでしまうのですが、そのことを知った語り手は、K君はとうとう月に行った、と感じるのです。

「私」が分裂する、複数化する、他者になるという物語は魅力的で、紹介し始めるとキリがない。時間もオーバーしたのでこれくらいにしておきます。

---

## 参加者との対話

---

安藤 では後半の質問時間に入りたいと思います。最初に聞きたいのは今回、「私」にまつわる話が多方面から出てきているんですけども、資料の最初の室井さんの文章と、それから吉岡さんの文章に、ある種の隔たりがあるような感じがします。室井さんの方は、かなり言語的な要素を持った「私」、どちらかというと「私」を名指す方の「私」と言ってもいいのかもしれないけれども、吉岡さんの「共通感覚」というのは、名指される方の「私」、ある種のクオリアのようなものに焦点を当てておられますよね。

吉岡 室井さんの文章は「情報と生命」の第二章なので、その前にあるぼくが書いたフィクションに対する応答あるいは考察みたいな感じでつながっているんですね。第一章にぼくが、ソフトウェアとしての「私」がシステムの中に侵入する、っていう話を書いたので、それを読んで反応したものだと思います。

安藤 なるほど。

吉岡 この本は、フィクションに出てくるトピックを展開して一般的な議論にするっていう、そういう構成になりました。そもそもこの『情報と生命』という本はどうやって書いたかという、新曜社の人から依頼されて二人で少し書き始めてはいたのだけど、なかなか進まない。それで、いい加減に早く書けみたいなプレッシャーをかけられて、どうしようって相談した結果、じゃあ合宿して集中して書こうということになって、室井さんがぼくの家で3日ぐらい泊まったんです。別々の部屋にこもって書き、数時間後に「こんなん書いた」と言って見せ合う、それで相手の書いたのを見てさらに書くというような、そういうやり方をしたんですね。

何ていうか、ぜんぜんデジタルじゃない、昔の作家がホテルに缶詰にされて書くみたいな、原始的なやり方をしたのです。そのうちにぼくがフィクションを書いてすぐにプリントアウトして、室井さんがそれを読んで触発されてエッセイを書く、みたいなパターンが出来た。その意味では対話的なやり方で共同執筆したとも言えます。

一方この「新・共通感覚論」の方はそれから数年後、自分だけで書いたものなので、そもそもテキストが生まれる経緯がぜんぜん違うのです。

安藤 「共通感覚」っていうのがかなり結構難しい使われ方されてて、飛躍というようなことも言っておられるんだけど、そこをもう少し説明してもらえますか？

吉岡 共通感覚っていうのは英語の「コモンセンス」という言葉の訳語で、普通は「常識」と訳すんですよね。だけど「常」という意味はなくて、より文字通りに訳したら「共通の感覚」となります。そこでいったい何が「共通」なのかっていうと、一方は万人に共通という意味で、ようするに誰でもそのように感じるということでこれが「常識」に近い概念です。もうひとつの意味は諸感覚に共通、つまり視覚や聴覚とか触覚とか、五感に共通という意味です。感覚は五つだけじゃなくもつとたくさんあるという人もいますね。分類すると感覚はそれぞれバラバラの異なった反応をするみたいなのですが、生きている私たちはそれらを同時に経験します。そうした諸感覚を通して存在

する共通の感覚。どれでもないが全てに行き渡っているような感覚というのが、共通感覚のもうひとつの意味としてあるんですよ。この共通感覚は抽象的なものとしても考えられるし、もっと直接的経験と結びついた意味もある。時々、色を見ると音が聞こえる人っているんですよ。

安藤 共感覚 (Synesthesia) ですね。

吉岡 そうです。共通感覚は、普通は万人に共通という意味が強いのだと思います。たしかに、万人に共通の感覚がないとコミュニケーションが難しいのだけど、あまりにこの「共通」が強調されて常識が押し付けられると、それが我々の想像力を縛る時もある。「誰でもそう感じるのが普通だ」という言い方は、使われる場面によっては非常に抑圧的になります。そう感じない人の経験を否定することになる。子供が成長していくにしたがって、大人の意に沿わない行動をとると「常識がない!」って怒られたり(笑)。そういう場合は、人に合わせろっていう命令で共通感覚とは関係ないよね。

共通感覚を一種の飛躍だと書いたのは、子供とか、あるいは自分とは異なった感覚的経験をしている人、たとえば視覚障害者の「視覚」について考えたかったからです。そのためには、「誰でもそう感じるのが普通だ」ということの「普通さ」というか、自明性をあえて捨てることが、むしろ「共通感覚」に近づく態度なのではないかと考えて「飛躍」と言いました。

発言者A 「承認欲求」とか「自分探し」っていうのはすごく現代的で、誰も少なからず持っている問題だと思います。でもその「私」に対する反省的な意識というか、「私」を求めていくっていう考え方は、近代以降の芸術家とか文学者とか哲学者から自覚的に始まった問題なのかなと考えていて……。たとえばアルチュール・ランボーが「私とは一人の他者なのです」って手紙に書いたことが有名ですけど、そういう風に作り手が自分の作り出すものに対して反省的・自覚的になっていくっていうことが、ある種、近代芸術の特徴の一つであると思うんですね。そのランボーに深く影響を受けた文芸批評家の小林秀雄も、初期の評論の中では「自意識」っていう言葉をすごく重視する。その「自意識」っていうのは、いわゆる日常的に我々が使う「自意識過剰だよ」みたいな自意識ではなくて、深く深く自己の作り出す思考とか言葉を反省的に常に反省的に捉え返していく運動だと理解しているんですね。

だから小林が素朴実在論的な日本の自然主義とか私小説みたいなものが嫌いだったのは、そういう反省がないじゃないかっていう意識があったのかなと思うんですけど……。何が聞きたいかという、そういう風に近代の芸術やその作家が深く、自分や「私」とか内面に立ち返っていくということは、そもそも何が背景にあって、そういうことが起こったのかなということが気になるんです。作り手が自分の作るものや、自分の行為を反省的に捉え返していくっていうことが、何故起こり始めたのだろうか……。

吉岡 それは重要な問いで、何を考え何をすることも「私」に行き当たる、すべてを反省的にとらえるというのは近代的存在であるということと同義ですね。文学だけでなく、近代的意識の中では物を作り出したり情報発信する人が、常にそれをする「私」をこの世界に記録することが大事になった。近代以前の人たちは、もちろん自分の名前はあるんだけど、何かを作り出したり発信したりする場合も、自分が起点というよりも、自分を通じて神様とか自分以外の超越的なものが表出し実現されるような意識があったと思います。だから「これは自分が作った」という記録、つまり署名するようなことは必ずしも重要ではなかった。それは過去の人々が慎ましかったからでは



なく、そもそも「私」というものの捉え方が異なっていたからではないかと思います。

それに対して近代人は「私」にこだわるようになったのだけど、その中に私の「私」性とは何かということ深く掘り下げていく方向性があり、これが近代的意識の可能性だと思います。それに対して私ってものを表層的に捉えて、自分の私生活とか私小説みたいな「私」性にとどまってしまうことも多い。単なる「プライベート」な世界ですね。プライベートな世界というのはたいていどれも似たり寄ったりで、まったく「私」的ではないのです。「私」というものを掘り下げていくと、その中に見知らぬ存在、他者が出てくるんですよ。自分を突き詰めていくと、自分がもはや自分じゃないものにつながっていることが分かる。そうしたリアリティーが見えてくるのが重要だと思います。

そうならないのは、それは本当に「私」について考えてないからだと思います。私はなぜ私なのか、このチラシのマンガにある室井さんみたいに「Why am I me?」と考えてないわけね。だから承認欲求とかいう場合の「私」ってのはまったく表層的で、「いいね」の数というのは、たまたま自分のアカウント名とか名前に対して反応があるというだけで、そんなことは「私」について考えなくたって可能ですよね。誰もがそうした承認欲求を持つとすれば、結局その「私」とはみんな同じであって、本当は「私」ではないのですよ。私小説とか、秘密のプライベートな告白みたいなものに、多くの人に関心を持ち「俺もそうだ」と共感するとしたら、それは結局みんな同じだということを示しているだけで、どこにも「私」はいない。

発言者B すいません。さっきからお聞きしながら結構かぶるところあるんですけど、ちょっとキーワード的に自分が今日聞いて思ったキーワードを最初に並べて質問にしたいんですけども。さっきおっしゃった「自我」と「自然（じねん）」ということがすごく……。

吉岡 「じねん」というのは？

発言者B 自然と書いて「じねん」という呼び方を河合隼雄さんが本に書かれていて、自然というよりも何か自分の意志じゃなくて、自分が運ばれていくような自然。自分を深く見つめていくと、他者との関わりがどうしても出てくるっておっしゃったことと繋がるなと思っていて。「人間も自然の一部である」という言葉がすごく気になっていて、自分も昔はある種のエコロジーとして受け取った言葉なんですけども、年を重ねるにつれて、自分の意志ではコントロールできない自分っていうのを自覚してきて、そういう意味でやっぱり人間も自然の一部なのかなと思っていて……。自分が「病い」なのかどうなのか分かんなくなっているものは、自分の意志でやっているのか、何か大きなものに動かされているのか……。

主体性がない自分を責められることもあったりして、その主体性のない自分ということを責められるけれども、実は自分はそのことを感じていて、自然に動いているいうところもあったりして……。でもそれって凄い古代人的な自分、夢に動かされたりとか、近代の中では病としか扱われないのかなっていう気もしているっていうことが一つで、そういう部分を先生の話の聞いてると、それでもいいのかなと思ってます。

それであともう一つ絡めたかったのは、「大きな物語」と「小さな物語」というのが哲学でよく出てくるものを歴史的な背景とか分からずに何か気になっていて、その「大きな物語」ってコモンセンスなのかとか、多様化っていうことが「小さな物語」なのか……。

あと「来歴」という言葉がさっき出てきて、何かそのストーリーの喪失みたいこととかが何かちょっと気になっていて、自分は歴史を残したいっていう欲求が強くて何かそこら辺の主体性が

ない自分と何か来歴を残していきたい自我みたいな……、やっぱりそれって何か病的なことなのか。何かを去勢している現代って、近代人として生きるためには、こうしていかないといけないとか、これでいいんじゃないとか、結局そういう感覚は消え、芸術でしか存在できないのかなとちょっと思うところがあって……で終わらない質問なんで(笑) 終わります。

吉岡 えーと、何を質問されたのかよく分からないんだけど(笑)、聞いた言葉から思ったことを答えます。まず「病い」ね。昔は「病い」じゃなかったものが今は「病い」になっているっていうところはあると思います。特に現代は何でも「病い」にしたがる。病気の名前を次から次へと発明するからです。それはたしかに表層的な意味での「私」へのこだわりと関係しているかもしれない。言い換えると自分の中にも自然の力が浸透している、そういう意識が弱まった。「私」を掘り下げていくと他者につながるというのは、昔だったら神様とか、超越的な存在のイメージがある程度共有されていたけど、それがなくなって自分しかいなくなると「病い」になってしまう。

室井さんとよく議論した話題なんだけど、ジュリアン・ジェインズ (Julian Jaynes) っていうアメリカの心理学者が、「二房性の精神 (Bicameral Mind / バイカメラル・マインド)」ということを書いたんです。日本語でも翻訳されている(『神々の沈黙』)んですけど、けっこうとんでもないことが書いてあるんですね。脳の右半球と左半球について、普通は左半球が言語処理をしていて、右半球の方は非言語的な世界の全体的な知覚を受け持つって考えられている。その二つが脳梁という太いケーブルで連結されています。人間は「私」という自己意識によってその二つを統一し世界をモニターしているみたいに思っているけど、その意識というのは比較的最近、3000年くらい前に文字言語を通して獲得されたものにすぎないというのです。かつては右脳と左脳はバラバラに作動していて、右脳が直観した知識を左脳に伝える時に、脳の中で言葉を聞くという経験があったという仮説を立てるんです。その時には「私」はない、意識はないんですよ。

これは「常識」に反しますね。私たちは普通、文字なんて持たない段階でも人類は意識を持っていたのではないかと想像するからです。道具を作って火を起こしたり、獣を狩ったりする行為を、原始人は意識的に行っていたように思えます。だってみんなで狩をしてもうちょっとで獲物を逃した時とか「畜生、獲れなかった!」みたいな悔しさを意識するのではないかと……。でもジェインズはホメロスのテキストを詳細に分析して、その中に意識にまつわる表現がほとんど出てこないと言うんです。意識の代わりに、私たちの祖先は頭の中で神々の声を聞いていた。右脳で知覚した世界の全体的情報が脳梁を通じて言語中枢に媒介された時、それが本当に声として再生されていたので、意識は必要ないんですよ。そうした経験は現在では統合失調症のような「病い」とみなされます。あるいは宗教的経験や、芸術的なインスピレーションの経験の中に、そうした脳の古い挙動のパターンがわずかに残っている。それらは昔はもつと一般的なものだったが、現在も完全には失われていないことは重要だと思います。

発言者B 以前室井先生に、室井さんと吉岡さんが男性脳と女性脳みたいな、そういうペアリングに見える的な話をしたことあって、そしたら「ばかやろー」って怒られちゃって、「両方の脳に分けられるものじゃなくて、両方を動かして考えてるんだぞ」って。

吉岡 室井さんが男性脳なの？ 室井さんと一緒に仕事した時にはそういうこと言われましたね、ボケとツッコミはどっちですかとか……。

安藤 「来歴」という言葉が使われましたけれど、来歴っていうのはちょっと特殊な言葉ですよ。

ある種の記憶とか、身体的な経験とか体験とか、それが積み重なってきたような「来歴」っていう言葉……。

吉岡 来歴とは、ここを通過して来たよと言うアイティネラリー (itinerary)、「旅程」みたいなものでしょうか。同じ場所に到達してるんだけど、到達するまでの経路地が違う。到達点で見ると同じなんだけど、そこに至る経路地の違いが、私の「私」性というか、個的な存在の特徴を形作っているのだと思います。

発言者C 来歴や共通感覚に関して、一つは教養、もう一つは生理的なものというふうに僕は理解しました。教養と呼ばれるような来歴っていうのは、多分に文化的な要素があるだろうなと想像します。つまり特定の文化によってこういう風を感じるようになったとか、文化を通して色々の判断をするようになったとか、ということです。もう一つの生理的な来歴というか、共感覚の例が出た時はむしろもっと生物学的なというか、生理的な、例えば目の錯覚だったら、こういう像を見たら誰でもこっちの方が長く見えるとか傾いて見えるとか、そうなるのは多分人間共通なんだろうから、そういうような次元での話だと理解したんですけども、この来歴ってのは両方について言ってるって事ですか？

吉岡 両方についてだと思います。例えば音楽の世界で、演奏者がある技能を習得する時に、色んな違う教えられ方をすると同時に、その人自身の生得的な個性とか癖もあるわけじゃないですか。だけど、違う経路を通ってもある旋律が正確に弾けるようになるっていう目標は同じで、目標に注目すると同じように見えるんだけど、そのそれぞれの演奏家が辿ってきた道筋は全部違ってきますね。

子供が鉄棒で坂上りができるようになる時も、いろいろと試行錯誤して練習するけども、ある子はこういうイメージでやったらできたとか、ある子は別なやり方でできたとか、できるようになる過程は全部違って、けれども同じところに到達するというような感じ。知識や教養という文脈でもそれはあります。京都大学の文学部にいた時に、他の先生と話をすると、けっこうみんな親も似たような分野の学者だったりする人が多いのですね。物心ついた時から自分の身の回りに知的な環境が整えられていて、人文学的な知識の世界に自然に親しみながら成長した人も少なくない。でもたとえばぼくはそういうのではなかったですからね。知識を習得する経路は全然違うわけです。なのに、同じ事柄について語れるってのはどういうことなんだろう。

そもそも僕は哲学の勉強をはじめた時、最初に勉強したのは18世紀のドイツ哲学で、イマヌエル・カントっていう人の書いた本で、今から200年以上前のプロイセンの哲学者がその時代の環境の中で知識形成していったプロセスと、僕のそれとは全然違うはずなんです。歴史的経験も、日常生活も、そもそも言語もまったく違うのに、なぜ同じ問題が理解できたり議論できたりするんだろうと思ったんです。同じように理解できているかどうかはともかく、来歴が全く違うのに、そもそも接点があるということが不思議なんです。

発言者C それは、単に生理的なものじゃないですね。

吉岡 生理的なものじゃないです。この、来歴が違ってるというところに豊かさがあるんじゃないかなという感じがします。技術にせよ知識にせよ、みんなが同じような仕方で習得していたら、

知的な生産性は落ちるような気がしますね。

発言者D お話ありがとうございます。難しいテーマなのでクリアに質問ができないかもしれないんですけど、「私」ということを考える時に、どこかにその二重性みたいなものをみんな感じることがあると思うんですね。なのでドッペルゲンガーですとか、あとフランツ・カフカのあの台詞が出てくるかと思うんです。二重性は何に起因してるのかなってというのが、その右脳と左脳っていう見方もありますし、言葉っていうのも 象徴的な言葉とそれ以前の印象みたいなものもありますし、あと主観と客観みたいなのところもあると思うんですけど、その二重性みたいなものっていうのは、そもそも何に起因してるとお考えなのか、おうかがいできれば。

吉岡 難しいな。二重性っていうか、多重性だと思うんですよ。それは私たちの知的活動、言葉、シンボルを使って考えるという行為に最初から伴っているものだと思います。

言葉で何かを発話する時、たとえば「私」っていう語を使って何かを言った瞬間に、多重化が起こっているのだと思います。自然音みたいに、単一の音みたいに聴こえるんだけど、そこには同時にそこに倍音とかいろんなノイズが同時に生成している。でも常識的な世界では私たちはそういうノイズ的なものを排除して、合理的に見える意味の中核だけを見ているのだけど、芸術的な表現活動とか、哲学的な反省的思考とか、言葉の働きを注意深く視るような経験をする時には、倍音やノイズ的なものが前景に現れてくる。つまり「私」といった瞬間に、「私」じゃないものがダーンと立ち上がっていると思うんですよ。

だから、何に起因してるかっていうと、それは言語それ自体に起因していると思う。「私」というのを考える際に、閉ざされた単一の存在というイメージにとらわれ過ぎると、思考の動きは鈍くなっていくのではないかと思います。ある程度の可動性が重要というか、武道やスポーツなんかでも多分そうなんだろうと思うけれども、理想の構えに固定するのではなくて、ある種どっち側にも動けるようなポジションに体を持っていく方が、パフォーマンスはよくなるのではないかな。

舞台で何か演技をする人が、練習の結果「ああしよう、これで行こう」と決めて臨んでも、ステージに立った瞬間、頭が「真っ白」になるっていうことがあるじゃないですか。それでパニックになる人もいるけど、ぼくはそういう状況は別に悪いことだと思ってないんですよ。頭がなんで真っ白になるかという、そういう大事な瞬間には、身体が頭を真っ白にしてるんだと思うんですよ。つまり練習して憶えたこととか計画とかにとらわれていると動きが鈍くなるので、それを全部忘れて何にもない状態を作り出しているのだと思う。頭が真っ白になるのは、反面すごくいいことで、優れた演じ手は頭真っ白になりながら、身体が習得したことを自動的に実行するような訓練をするのではないかな。

発言者E 先程、コモンセンスですね。二つ意味があるとおっしゃってしまして、一つは共通な常識というものと、もう一つ、いわゆる自分で感覚を二つ持っているんじゃないかという風なことをおっしゃっていたかと思うんですが、今お話しになっている内容がそのことじゃないのか。そのことを指してるのではないのかと理解してるんですけど、いかがでしょうか。つまり、頭が真っ白になって自分ではない違う側から聞こえている……。自分が自分ではないということや、例えば、頭で考えることと、それから触覚と視覚、それから聴覚。頭の中で、例えば脳が右と左に別れるという話もあったんですけど、話として共通なテーマとしてつながってきているのではないかなと、そういうふうに思いました。ちょっと感想ですけどね。

吉岡 それは広い視野から解釈していただいたのだと思います。さっき共通感覚の二つの意味

と言っていたのは、一つは万人に共通のコモンセンスという意味と、それから五感に共通というか、別々の種類の感覚を通して共通の感覚があるという意味で言ったんですけれども、今言っていたように拡大解釈すれば、確かに二つの意味は繋がっています。一見全く違って見えるものが、どこかつながっているように感じるっていう意味の共通感覚。普通はそのようには定義しないかもしれませんが、考えることは可能だと思います。面白いです。

発言者F え一つとあんまり私難しいこと考えられないので、何か話聞いていて、これとこれ一緒なのかなって思ったっていうことだけなんですけど、共通感覚って、今回は視覚で例えてるんですけど、もっと分かりやすいというか、私がよくイメージしてるのが食べ物の好き嫌いって、これに近いかなって思うんですけど、どうですか。

吉岡 食べ物の好き嫌い？

発言者F 何か共通感覚っていうか。同じものを食べてても、自分が食べたらおいしくない。違う人が食べたらおいしいっていうか……何だろうな？ 辛さの度合いとかも、「全然辛くないよ」って言った人の辛さを感じてるレベルと、「めっちゃ辛いじゃん」みたいな。みんなの認識で辛いっていう個のレベルが違うから（共通感覚が？）発生しちゃってるのかなとか思ってたんですけど。

吉岡 たとえばぼくは辛いのがあんまり得意ではないのだけど、すごく辛いのが好きな人と一緒にカレー食べたとして、ぼくが2倍の辛さで「辛い」と思った感覚と、もう一人の人が30倍の辛さで「辛い」と思った感覚が、辛さの客観的な刺激の量は違うのだけれど、それぞれの人の内部に起こった「辛さ」の経験は共通なんじゃないかと、そういうことですか？

発言者F イメージしやすい。自分の中でそう解釈してたんですけど、その解釈でいいのかなって。

吉岡 でも、食べ物の好き嫌いって結構複雑な条件付けだからね……。単純な味覚以外のいろんなものと結びついているから。味覚自体はそれほどでもなくても、子供の時の楽しい思い出と結びついてたら美味しいとか。逆にいやな状況で食べさせられたものは不味いですよね。でもたしかに、五感といってもそれぞれの感覚は対等ではなく、視覚や聴覚がわりと独立して客観的に考えられるのに対して、触覚、味覚、嗅覚は複雑で単独には考えにくいのだけど、その反面私たちにとってより直接的で、共通感覚を強く呼び起こすということは確かだと思います。

安藤 本日もありがとうございました。（拍手）

2023年10月14日(土) 於：京都芸術センター「大広間」